

公開講座実施報告：「生涯学習としてピアノを弾こう」の試み

生涯学習教育研究センター

藤 平 誠 二

はじめに

報告者（以下、私）は平成13年度、14年度、15年度とピアノ学習をテーマとする公開講座を実施してきた。

平成3年度は「生涯学習の楽しみ」と題して3名の講師が担当した内、5回を「ピアノを弾く」として私が担当したもので、これは本格的なピアノ学習講座にはなりえず、いわばその後の講座の実験的性格のものに止まった。

ここでは本年度、平成15年度の前期に行った「生涯学習としてピアノを弾こう・入門編」（10回、22.5時間）を中心に、14年度の講座および15年度後期の「基礎編」を含めて、その実践報告をする。

報告の動機と趣旨は、

- 1) 講師の私は元々はドイツ文学研究が専門であり、授業担当も主にドイツ語教育であり、その後「生涯学習教育研究」に携わった者で、音楽教育・ピアノ教育は本来専門分野ではない。それだけにアマチュアとしてこうした講座を実施するに当たり様々な試行錯誤と工夫を要したのである。そこで、そうしたひとつの試みとしての講座実践について整理し、報告することにもいささかの意義があろうと考えたのである。
- 2) この講座は生涯学習教育研究センターが企画して平成8年度から実施している特殊な講座で、「学生にも授業として開放する形の公開講座」の一貫として行ったものである。そこで、そうした講座が持つ長所や問題点の一面をこの講座の報告によって伝えることもできると思うのである。

公開講座であり同時に学生には正規の授業となる講座は、平成6年度よりセンターで検討を始め、8年度に「今を生きる人間学」と題して開始したものである。前期後期それぞれ3つの講座（各4回）から成る総合的な講座で、一つの講座毎に公開講座として一般市民に公開し、かつ、学生には3講座を通した受講により「総合科目」の単位を授与するという形態の講座であった。

このような、公開講座と正規授業がいわば合体した形の講座は当時、少なくとも国立大学には他に例がなく、その先駆となったものであった。その後滋賀大学で実施形態は異なるものの同様な講座が試みられ、徳島大学では逆に正規授業を一般市民に公開するという講座を開始し、その方式は現在ではいくつかの国立大学に「公開授業」の名で普及、発展しつつある。

茨城大学では、平成15年度より「教養科目公開講座」として公開授業を開始しているが、従来の「公開講座を授業として学生に」形式の講座も継続し（この間、講座の内容、実施形式は様々な変更、改善を経てきたが）、このピアノ講座はその一つである。

この講座は正規の学生向け授業としては、教養科目の内の総合科目、人間・文化系科目に属し、日曜日午後に1回135分間、10回で行う集中講義であった。

ピアノ講座の開講については、私は十代の頃からオルガン、ピアノの演奏に強い興味を持ち、その学習を継続しており、ベートーヴェンの後期のソナタなど高度な曲までを（一応）演奏する技術を身に付けている。ミニコンサートや伴奏、また、人に教えるなどの多くの経験もある。この間、クラシック音楽を中心に幅広いジャンルの音楽を鑑賞、学習し、基礎的な音楽理論も独自に学んでおり、ピアノと音楽一般に関する知識と認識を深めてきた。

但し、専門的な学習経験はなく、ピアノ教師に付くとか教室に通うとかはせず、わずかに中学、高校の音楽教師にアドバイスをいただいた程度であり、文字通りの独学であり、アマチュアである。ピアノを弾くことは私のまさに生涯学習である。

それで、入門・初級レベルのピアノ演奏法を教えるのに必要な技術や経験、知識や認識は持ち合わせており、一方、むしろアマチュアとして、なにより生涯学習の体験者として、学習法に重点を置いたピアノ講座は可能であり、また有意義である（自身も楽しめる）との思いに到り、「生涯学習としてピアノを弾く」講座の開講を思い立ったのである。「専門家」ではなく、アマチュアがアマチュアを指導することはそれなりの十分な意義があると考えるのである。

一方、指導の対象として一般市民と学生に同時に行うことに意義があると考えた。「一時のピアノブームで子どもに習わせたがその後は粗大ゴミとして家で眠っている、弾けるなら、自分が弾きたい」という一般人はかなり多いと見込まれる。一方、音楽専攻以外の学生でもピアノを弾けるようになりたいという願望を持つ学生は多いであろう。そして、市民、学生が共にピアノ学習に取り組んだら世代間交流にもなり、両者に有益であろう、との考えである。

開講前の準備

1. 講座の趣旨、方針、内容（教示項目）、授業方法等の検討
2. テキストの選定

14年度は「バイエル」前半からの抜粋と入門レベルの楽譜を選定し、コピーしてテキストとしたが、煩雑になるきらいがあり、15年度は以下の市販のものをテキストとした。

「大人のためのピアノ悠々塾・入門編」ヤマハミュージックメディア編

3. 授業で扱う曲目の選定
4. 毎回の授業内容と進行のメモ（講師用）の作成
学習事項のメモ用紙（受講生用）
5. 事前アンケートの作成（13年度、14年度のみ）
6. 紙鍵盤作成用紙のコピー
ファイルによる譜面立ての作成例（15年度後期のみ）
7. 練習用キーボード（シンプルキーボード）のレンタル手配（15年度後期、「基礎編」）
8. 教材機器（プロジェクターなど）の試作動、教室の配置など

事前アンケート（14年度講座）は、初回に受講者対象に行ったもので、受講者のピアノ経験など、授業運営上参考になると思われる事柄を予めおおまかに把握しておくためである。その内容と趣旨、および回答集計結果はおおよそ次のようであった。

1. 音楽が好きか・・・学生受講者の中に「興味がない」者がいるか否かを知るため
2. 家に（学生は、実家に）ピアノまたは電子ピアノなど鍵盤楽器があるか・・・ピアノ等に日常的に接することが可能かを知るため
3. ピアノ経験があるか (1)全く弾けない、(2)少しは弾ける、(3)かなり弾ける・・・未経験者と経験者の割合を知るため
4. どんな音楽が好きか・・・好みの音楽ジャンルの傾向を知るため
5. 弾きたい曲は・・・頻度の多い曲を学習曲に加える予定による
6. カラオケは好きか・・・歌唱の愛好程度の一面を知るため

{学生の回答} 全42名

- 1については、さすが「興味がない」学生はゼロであった。
- 2については、「ある」が36名、「ない」が6名
- 3については、(1)が29名、(2)が12名、(3)が1名
- 4については、ポップス系20名、ロック・ジャズ系19名、クラシック系15名、その他10名・・・(複数回答で重複あり)
- 5については、ポップス系の曲29名、クラシック系の曲17名、ロック系の曲5名、アニメ・ゲーム曲4名、童謡1名、校歌1名
不明7名
(なお、学生、市民を含めて弾きたい曲の最多はショパンの「別れの曲」6名であった)
- 6については、「とても好き」が9名、「嫌い」が7名

{一般市民の回答} 全20名

- 1については、当然、「興味がない」はゼロ
- 2については、不明1名を除き全員「ある」
- 3については、(1)が12名、(2)が7名、(3)が1名
- 4については、クラシック系10名、ポップス系6名、童謡3名、歌謡曲3名、映画音楽2名、全般に1名、不明2名
- 5については、ポップス系の曲9名、クラシック系の曲7名、唱歌3名、歌謡曲3名、日本の歌曲1名、世界の民謡1名
- 6については、「とても好き」が2名、「嫌い」はゼロ

・・・この講座・授業は「入門編」であって「まったく弾けない者」を対象とする旨公示して受講者を募集したのであるが、予め予想したように、実際には「既に、少しは、(または)かなり弾ける者」が相当数含まれていることがこの事前アンケートからも明らかになった。

なお、明確に生涯学習の観点から音楽教育を目指し、かつ学術性のある**参考書**としては以

下の書がある。開講に当たり部分的に参考にした。

「音楽の生涯学習 - 理論と実際」高萩保治・中島恒雄編著、玉川大学
出版部 2000年

*** 15年度講座「生涯学習としてピアノを弾こう・入門編」***

平成15年度前期の「入門編」講座の受講者は（教室の収容数の関係もあり）学生28名（希望者の内無作為選抜）、一般市民19名（募集20名）であった。

学生の内訳は、2年次以上6名、1年次人文学部7名、教育学部9名、理学部1名、工学部5名

市民の内訳は、男性5名、女性14名、20代1名、30代1名、40代4名、50代7名、60代6名

（因みに14年度講座での市民内訳は、全20名、男性6名、女性14名、40代6名、50代6名、60代6名、70代2名）

開講時期は、5月11日～7月13日（毎日曜日）午後3時～5時15分

教育機器は、電子ピアノ1台、キーボード1台、紙鍵盤、プロジェクター
（後期「基礎編」ではシンプルキーボード4台使用）

第1回 授業の内容と方法、生涯学習について

* 講座の説明

1. 一般市民と学生が共に学ぶ講座であること・・・世代間の交流と相互理解を期待すること。
2. ピアノ経験が全くない人を対象にした「入門講座」であること。
・・・こうした講座の場合、既にかんりの経験のある受講者が混じっているものである。そうした受講者への注意と安易にならないようにとの心構え。
3. 限られた時間内での、しかも集団授業であること・・・マンツーマンの「ピアノ教室」と基本的に異なること、各自の自習が不可欠であること。
4. 講座の趣旨について
 - 1) 簡単な楽譜による曲を実際に弾けるようにする「実技」講座であること。
 - 2) ピアノを弾くために必要な音楽的基礎知識と、音楽一般に関する基本的な認識（考え方）についての「講義」であること。

最も重点を置くこととして、3) 実技と知識・認識の学習体験を通して、ひとつの事柄の学習法とその困難さ、楽しさを体得し、それを通して「生涯学習」の認識と意欲を養うこと。・・・ピアノ学習はその一例と考えること、但し生涯学習に極めて相応しい学習であること。

5. その他

- ・演奏練習は「紙鍵盤」(各自作成)、キーボード(1台)、電子ピアノ(1台)で行うこと。毎回順番に電子ピアノで実演練習をしてもらうこと。

最終回に全員の「発表会」を行うこと。

(・・・紙鍵盤は、音がでないこと、打鍵感覚が得にくいことなど大きな欠点があるが、集団授業の場合は一面、音がでないことが返って長所にもなる。入門段階では紙鍵盤での練習も、指を鍵盤に位置づける感覚を養う上で有益である。音感覚は教室でのキーボードや電子ピアノで試演、更には家庭のピアノ等での練習などで補える。)

- ・学生は「総合科目」の2単位を取得できること。評価の基準について。但し、「うまく弾ける」ことで評価するのではないこと。

*テキストの販売

*「重要事項メモ用紙」(予め授業項目やキーワード等を記載した用紙、ノート替わりになるもの)の受講者への配布

*講師の実演を聞かせる

以下の、最近よく耳にしたと思われる曲(歌)の一部を演奏し、「数年練習すればこうした曲も弾けるようになる」とコメントして、受講者の動機付けや意欲を刺激するため。

ショパン：ノクターン(遺作)・・・映画「戦場のピアニスト」主要曲

宇多田光：COLORS

中島みゆき：地上の星

*「私(講師)とピアノ」について・・・(14年度講座の場合を含めて)

ピアノの「生涯学習者」としての自己紹介を兼ねて、自身のピアノ経歴をかいつまんで話し、その間にピアノ学習に関わる重要な観点についてコメントする。例えば、

- ・母親の影響で生来音楽好きであったこと・・・才能と努力について
- ・8歳の時ベートーヴェンの伝記絵本を買い求めたこと、「月光ソナタ」に感激したこと(「月光」一部演奏)・・・価値観の重要性について
- ・家のオルガンでバイエルを独習し始めたこと(「バイエル93番」演奏・・・メロデーを知っていること、および「暗中模索」の重要性)
- ・中学、高校時代、音楽教室のピアノを借用し熱中したこと、ラジオで手当たり次第クラシックを鑑賞したこと、また、参考書、解説書で基礎知識を独学したこと・・・音自体と音楽全般が好きであることの重要性、および、「聞くこと」の重要性、また、関連事項の学習の必要性
- ・中学時代、朝礼で全校生徒の前で演奏(「エリーゼ」など)、その他大学学園祭での演奏のこと(「雨だれ」一部演奏)・・・人前で弾くことの難しさや意義
- ・大学時代は「時間貸しピアノ」で練習したこと、27歳で初めてピアノを買ったこと、30歳以降ポップスなど幅広いジャンルの曲を楽しむようになったこと・・・ピアノ学

習状況の時代的変遷、様々なジャンルの音楽に親しむこと（聞くこと、歌うこと、弾くこと）の重要性

- ・子どもや大人に教えた経験のこと・・・人様々な個性があること
- ・作曲したこと、ミニコンサートのこと（ベートーヴェンのソナタ 32 番の導入部演奏）、バイオリン伴奏の経験、現在老人ホームなどで「歌う会」（伴奏）ボランティアをしていること（「月の砂漠」演奏）・・・ピアノ演奏は人的交流を増すなど様々な効用、働きがあり、生きることの支えとなる楽しみに成り得ること

*その他

1. 紙鍵盤作成用紙の配布と作り方の説明・・・その際、「学習に当たっては、それに必要なものは自分で工夫して用意することが望ましい」ことを強調する。
2. 教材機器の運搬当番について・・・電子ピアノ等、教材機器の授業後の運搬は毎回学生 4 名の当番で行ってもらう。

*生涯学習について

生涯学習については、次の 4 点に絞って解説した。

1. ラングランの国連ユネスコでの提唱が直接的な契機となり、先進国を中心とした国際的な動向に触発された理念と実践であること。
2. 日本ではことに、科学技術の発達、情報化、高齢化など社会の急激な変化に適応する必要性がその理由とされていること。
3. 個人的側面（自己確立）と社会的側面（組織整備、社会変革など）の二面性があるが、両者は本質的に一体化するものであること。
4. 本来の理念（ラングランの発想）は、二度の世界大戦と近代産業社会の負の側面への反省から発した「人類への危機感」が基底にあること。人類の救済、そのための従来の教育（学校教育）への反省、そのための教育改革（教育制度の再編統合）、そのための生涯学習という筋道をもつものであること。

（この講座・授業もそのような高度で広範な生涯学習としての意識で受講してほしいこと。単に「ピアノを弾く」のではなく、ピアノ学習がそのような生涯学習につながるものであることを体得してほしいこと。）

第 2 回 ピアノを弾く準備

*鍵盤について・・・テキスト、および各自の紙鍵盤を見ながら

白鍵と黒鍵（「猫ふんじゃった」の例、その並び方、音の高低、「ド」はどこか、中央のド、オクターヴ、階名、ハ長調

・・・学習の初めは「暗中模索」が重要であること

*音を出してみる（紙鍵盤で指をおしてみる）

ドレミファソファミレドを弾く、右手-左手-両手

***姿勢について**

椅子の高さ、鍵盤との距離、背筋、腕の形

***指について**

指の形と打鍵、指番号、指の構造（人間の指はピアノを弾くためにできてはいないこと、薬指と小指の分離が困難な理由）、爪を切ること、指の訓練法、日常的に左手を使う習慣を付けること

- ・・・学習の初めは「基礎」が重要であること、基礎を身に付けてから後に自由に発展させること

***ピアノについて**

その歴史的概略（モーツァルト、ベートーヴェンの時代から）、名前の由来（ピアノ・エ・フォルテ、強い音も弱い音も出せる）、グランドとアップライトピアノ

- ・・・歴史を知ることはその物（事）の本質を識ること

***楽譜について**

音符の位置と鍵盤・音との関係（一定であること）、階名と音名、中央ドの楽譜上の位置、五線（第1線、第1間）と加線、ト音記号とヘ音記号（両方のドの位置関係、大譜表と手、小節

- ・・・楽譜無しでピアノを弾く方法はあるが、いずれ高度な曲を弾く場合は楽譜が必要となること、また、楽譜は音楽の要素を理解する上で重要であること
- ・・・ピアノは「楽しみ」であると共に、そのためには「いかに多くの知識や認識が必要か」の認識について

*楽譜（音符）を見ながらドレミファソファミレドを弾いてみる

*「かえるの歌」をドレミで歌ってみる（休符について）

*「きらきら星」の予行練習（メロデーのみ、暗譜して弾くことを宿題）

第3回 曲を弾き始める

*「きらきら星」の講師による演奏・・・（以下毎回同様に）

曲目の概略を解説・・・曲についてある程度知ることは、その性格を把握する上で重要であること

*「きらきら星」の楽譜を見る

ト音記号・ヘ音記号、指番号、4分の4拍子、小節線（第1、第2小節）、スラー、上下五線の垂直に合う音符が同時の（左右の手の）音出しであること

- ・・・楽譜がいかに視覚的に有効なものか、および、初めにしっかりと楽譜を見て

(「楽譜を読む」)「意識すること」の重要性について

* 音符と長さ (拍) について

* 紙鍵盤による受講者いっせいの練習

講師の演奏に合わせて、左右別・左右共に、ドレミで歌いながら・黙して、各自自由な練習・・・(この件、次回以降同様に付き以下記載省略)

* 練習の仕方について

暗譜・「見譜」と「ドレミ歌い」・「黙弾」・「歌唱い (歌詞のある場合)」の組み合わせ

* 電子ピアノ等について

- 1) (ピアノの豊かさはないが、最近の一部の電子ピアノでは) ピアノに近い音色とタッチがあること
- 2) 様々な機能 (変調、他楽器の音色、録音、デモ曲の視聴など)
- 3) 持ち運びが容易な機種があること、安価なこと

および、キーボードについて

* 「喜びの歌」の講師による演奏 (ドイツ語で唱いながら)

曲目の概略を解説・・・(この件、毎回同様であるので以下記載省略)

* 「喜びの歌」の楽譜を見る

強弱記号と速度表示について、付点 (4分) 音符と8分音符について

* 楽譜を見ながら弾くことに慣れること、また、楽譜置き (立て) の工夫について

・・・学習の際は「教えてもらう」以上に「自分で工夫すること」の重要性について再度強調

第4回 曲を弾く・リズムとメロデーについて

* 前回学習した2曲を、講師の演奏と共に、全員同時に紙鍵盤で復習する

* 前回の2曲を電子ピアノで受講者 (各曲、一般市民2名、学生2~3名) に弾いてもらうそれぞれの演奏に付き、必要に応じて講師がコメントする・・・(この件、次回以降同様につき以下記載省略)

* 「ジングルベル」を練習する

* 工夫して弾く

- (1) メロデーにスタッカートを混ぜて
- (2) 左手伴奏を全音符から2部音符にして(2拍ごとに)

*リズムについて

本来のリズム＝拍と長短のリズムについて、4拍子と3拍子の基本とその多様性について、多様なリズム(8ビート)、「3・3・7拍子」について、俳句は4拍子」についてリズムからメロデーを類推するクイズ(「ノヴァの歌」?など)

*「オーラ・リー」を練習する

*指の位置と指の移動について

*左手伴奏を工夫する(フレーズの間をドシラソに、など)

*「唱うように弾く」こと

メロデーの長短の崩し(テンポ・ルバート)

*練習の仕方

部分に区切って繰り返す、難所は左右別手で繰り返し練習、「初めから終わりまで、間違えながら・つかえながら、のんびんだらりと弾かないこと」、「間違え癖」を付けないこと

第5回 指の移動

*「見よ、勇者は帰る」を練習する

*指の移動(指換え、指越え)について

*「シューベルトの子守歌」を練習する

・・・ドイツ語の歌と共に、講師の演奏

*楽譜を見る

左手伴奏はト音記号譜であること、Cについて、指越え、クレッシェンドなど

*ハ長調音階と運指の練習

鍵盤と音階の仕組み(長音と短音)について、指くぐり

*「音符が読める」と「楽譜が読める」について

・・・楽譜に書かれていること(表現されていること)全てを読みとることの重要性、ことに、「その曲における決定的な指示」を見落とさないこと(例、ブルクミュラー

「アラベスク」の sf・・・実演)

***練習について**

毎日 30 分は、「楽しく」と共に「辛抱強く」（武蔵の「鍛錬とは」）、「継続は力なり」
の事例 2、3

第 6 回 ピアノの機能と効用について

***講師による演奏**（モーツァルト「ソナタ、トルコマーチ付き」第 1 楽章、主題と第 1 変奏）を聞いてもらう

***「エデンの東」**を練習する

***楽譜を見る**

3 拍子、アウフタクト、臨時記号、タイ、D. C. 記号

***ピアノの機能（特徴）について**

- (1) 強弱音が自在に出せること
- (2) 音域が広いこと（オーケストラに匹敵）
- (3) レガートとスタッカート奏法が可能なこと（唱うようになめらかに弾くことも、打楽器のように弾くこともできる）
・・・ペダルを用いて打鍵済みの音も弱音化できる例（ベートーヴェン、ソナタ「悲愴」第 1 楽章、導入部）
- (4) 鍵盤楽器であり、鍵盤構成により音楽要素（ことにハーモニー）の理解が容易なこと

***「家路」**を練習する

***楽譜を見る**

リピート記号、メロデーのハーモニー付け

***ピアノの効用について**

- (1) 身体運動として、指全部をほぼ均等に使うこと、指だけでなく（本来は）全身運動であること
- (2) 精神運動として、知・情・意の総合的活動であること
- (3) 心身の総合的活動であること
- (4) 集中力や自己コントロール、自己表現などにより自己確認ができ、一方、自己解放になること
・・・ことに、一般に日本人にとって「自己解放」が極めて重要なこと
- (5) 指運動と脳の働きの生理学的関係により、ストレス解消、呆け防止、若返り、セラ

ピーの効能があること

第7回 ハーモニー

* 「ロング・ロング・アゴー」を練習する

* ハーモニーについて

基本三和音、コード、C・F・G、ハーモニーの多様性について

* 同曲をドソミソ等の伴奏で弾いてみる

* 「バイエル 66番」(コピー配布)を練習する

* 同曲における三和音の確認

* 「バイエル」について

- (1) 古くから我が国で最も普及した教則本であること、多くのメロデーが知られている(しばしば商業で用いられている)こと
- (2) 短所(重音練習が少ない、リズムが単純など)もあるが、長所(理論に応じて段階的に技法を身に付けられるなど)もあり、成人にはなお有効な教則本であること

* 最近のピアノ学習の状況について

- (1) 様々な教則本、ほとんど全てのジャンルの曲、最近のヒット曲の初級用楽譜が市販されていること
- (2) CDやテレビ、パソコンでの学習も可能なこと
- (3) 「大人のための」学習法や機会が普及していること

第8回 重音化

* 「Happy Birthday to you」を練習する

* 同曲の伴奏を重音化する

* メロデーと、メロデーを唱うこと

受講者が「キラキラ星」を唱い、講師が「霞か雲か」をピアノで、同時に演奏してみ
て融合することを確かめる

- ・・・メロデーはリズムとコード(の進行)の上に成り立っていること、
- ・・・ピアノで唱うこと、そのために歌が好きで、よく唱うことの重
要性

* 「婚礼の合唱」を練習する

* 楽譜をみる

休符、アクセント

* 曲の構成について

A - B - A 形式、その他について（練習した曲で確かめる）

・・・曲の構成を意識、認識することの重要性

第9回 復習と発表会のために

* 練習した曲全ての総復習（講師の演奏と共に）

* 「ピアノを弾く」とは

単に「間違えずに、音を出す」ことではなく、まず、1) 曲全体を理解（解釈）し、
2) 楽譜により曲の細部を理解し、3) それを（自分なりに）表現すること、4) そのためには「技術」の裏付けが必要なこと・・・「解釈」「技術」「表現」が三位一体となること、そこに初めて本当の「楽しみ」が生まれること

・・・「入門段階で（何とか弾くことが精一杯で）高度なことを解説（要求）されても意味がない、それは先の話」と思う人に対して、「入門段階から、事の本質的問題、高度なことを知っておくこと」の重要性、「先の話」ではないこと

* ピアノの楽しみ方について

- (1) 様々な演奏形態（「弾き語り」、「連弾」、歌や他楽器の伴奏など）
- (2) 好きな曲を（楽譜を探して）弾くことの楽しみ・・・「一曲主義」もあること
- (3) 音楽は広大にして多様な世界を持っているので、ピアノでできるだけ多様な音楽を弾き、表現してみることに

* 発表会の進行方法について予め説明

* 「あがる」ことについて

- (1) 一流ピアニストでも「あがる」（ホロウィッツの逸話）
- (2) 子どもは比較的「あがらない」のは何故か
- (3) 生理的自己コントロールとしての呼吸の仕方
- (4) 自己を「さらけ出す」ことの重要性
- (5) 絶対の自信を付けるためには練習しかないこと（美空ひばりの逸話）
- (6) 人前で弾く経験を重ねること

* （学生に）レポートの課題について、（後述）

第10回 発表会

*出席者全員に電子ピアノで1曲弾いてもらう

*選曲は、授業で練習した曲、または、自由に選んだ弾きたい曲

*順番は、挙手をしてもらい前方座席のものから順に、挙手の無い者は名簿順

*学生にレポートの課題等について再度説明する

*学生用の「授業アンケート」と一般市民用のアンケート（生涯学習教育研究センターが指定したもの）をとる

学生向けのレポートのテーマは、「この授業で新たに学んだこと、得たこと（具体的に）」とした。授業を通じて、ピアノや音楽一般、学習法、その他について新たに学んだと自覚される知識や認識を整理し、報告せよとの趣旨である。何かを学習した場合、そこで何を新たに学び、得たかを整理して意識化しておくことが重要であるとの考えによる。

レポートの結果を総合的に見ると、1)「新たに学んだこと」を具体的に把握し、記した学生もいたが、多くの場合は「楽しかった、充実した良い経験であった、弾くのは難しかった、努力の必要を感じた」という類の平凡で抽象的な記述に止まっていた、2) 授業では、学習法や心構え、ピアノや音楽に関する考え方などを強調したが、その点で「新たに学んだ」と記述した学生は比較的少数であった（ことは残念である）、3) 3分の1強の学生が、上の世代（一般市民）と共に学んだことは有意義であった旨言及していた（事が印象的であった）。

一般市民向けのアンケートは、生涯学習教育研究センターが用意した公開講座全般についてのアンケートを用いたが、本講座に直接関わる設問についての回答（8名）を概略報告すると、

- (1) 「受講の動機、目的」については、「教養知識を高めるため」3名、「生活に役立つ」1名、「弾けるようになりたかった」3名、その他1名
- (2) 「講座の内容」については、「よく理解できた」5名、「少し難しかった」2名、「難しかった」1名
- (3) 自由記述では、「良かった、楽しかった」の類3名、「収穫を得た」の類2名、「指導が良かった」の類2名、「生き甲斐となった」の類1名、「大変だった」の類1名

最後に、この講座について講師として感想を含めた**自己評価**をすると、

- (1) 専門外でもあり、また実技を伴う講座であることから、この講座開講に当たっては、その準備に多くの時間と思考を費やし、また緊張感と期待感を持って向かった。講座実施の際にも教材機器の運搬設置や実技指導に多くの労力を費やし、一言でいえば「大変」であった。しかし、一方講師自身も学ぶところ多く、何よりも「好きなことを生

かせる楽しみ」があった。

- (2) このような講座では、予想されることであるが、受講者は専ら技術的にピアノを「弾けるようになりたい」ことだけに意識が集中してしまう。その反面、「学び方の諸問題」や「ピアノや音楽に関する様々な認識のあり方」など、授業中に強調した重要な事柄については、受講者の関心を引きにくい。レポートやアンケートが示す限りでは、その点について、受講者に十分意識化してもらうことに成功したとは言い難い。
- (3) 講座・授業の成果としては、学生のレポートや一般市民のアンケートでおおむねプラスの成果を得ていたし、学生受講者の内「途中脱落者」が28名中3名と、他の授業に比較し少数であったことなどから十分な成果があったと評価できよう。但し、一般市民受講者の場合、19名中5名が途中で出席を止めており、それをどう評価するか難しいところである。いずれにせよ、受講者ほぼ全員が熱心に受講していたことは事実であり、最後の発表会では、一人一人がそれぞれの能力で「弾けるようになり」かつ「個性豊かな」演奏を披露したのは感激的でした。

なお、15年度後期の「基礎編」においては、「少し弾ける人＝バイエルの半ば程度」を募集したのであるが、そのレベルの理解がまちまちで、受講者の実技能力にかなり開きがあり、集団指導するのに困難があり、その点がことに検討を要することであった。

以上